



Column 1

インスーとスティーブとの思い出

筆者は、2005年2月初めから2005年11月末までの10か月間、文部科学省の「海外先進教育研究支援プログラム」により米国での在外研究の機会を得ました。研究テーマは「解決志向アプローチの学校教育への適用」で、解決志向アプローチの本案本元と言えるインスー・キム・バーグ（Insoo Kim Berg）とスティーブ・ディ・シェイザー（Steve de Shazer）の2人がメンターでした。

当時、まだ生後11か月の娘と妻を日本に残しての在外研究は、不適なタイミングとも思われました。しかし、私が米国滞在中の9月にスティーブが、帰国後の2007年1月にインスーが相次いで他界してしまうという運命を勘案すると、まさに千載一遇のチャンスだったと、ありがたいご縁に感謝しています。

当時、2人の活動の拠点であるBFTC（Brief Family Therapy Center）はウイスコンシン州ミルウォーキー市から西へ10kmほど離れたワウトサ（Wauwatosa）という町にあり、2人の自宅も兼ねていました。格差の大きい米国らしく、ミルウォーキーからワウトサに向かうバス通り沿いには貧困層が暮らす粗末な住宅街が長く続きますが、ワウトサに入ると街並みは一転しました。ミルウォーキー市内では、秋頃にラジオから「今年になって、市内で70人目の銃の犠牲者です」などと物騒な放送が流れてくる一方で、ワウトサには、自宅玄関に施錠の必要もないほど安全な別世界が広がっていました。

夏のある夕暮れに、BFTCを訪れたピーター・ディ・ヤング（Peter De Jong）とインスーご夫妻、そして私の4人で自宅近くの小川沿いを散歩したことがありました。無数のホテルが乱舞する幻想的な光景が鮮明に思い出されます。

6月のスティーブの64歳の家族誕生会（スティーブ、インスー、娘のサラ、インスーの妹とその夫が集いました）にも参加させてもらいましたが、これが彼の最後の誕生日になってしまいました。「必要以上に病院の世話にならず、自分の仕事をやり続けて最期を迎える（I never want to be in the hospital, I'd rather die with my boots on.）」と話し、その信念を貫いた氏の生き方に心服しています。いたずらに無益な治療（「問題解決」）に執着することなく、自分に残されているすべてのリソースを活用して生を全うした生きざまは、「解決志向」そのものであったと思います。

最愛のスティーブの後を追うように、わずか1年余り後にインスーも天に召されました。夫婦、そして共同研究者として最高のパートナーの2人らしい生涯であったのではないのでしょうか。素晴らしい思い出をくれた2人に心から感謝し、ご冥福をお祈りいたします。